

## 新型コロナウイルス感染症について

こまち  
心臓病院  
院長 和田 豊郁



感染症とは、病原体がからだに侵入して起こる病気のことを言います。病原体には、細菌、リケッチア、クラミジア、ウイルス、真菌、原虫、寄生虫などがありますが、インフルエンザや新型コロナウイルス感染症が流行していることもあり、ウイルス感染症について説明してみたいと思います。

ウイルスとは、顕微鏡で見える細菌よりもずっと小さい粒子で、それ自体では何もできないのですが、感染して細胞に入ると、その仕組みを乗っ取って自分の複製を作ります。つまり、もともと自分のからだの細胞だったものが、ウイルスに乗っ取られて、いわばウイルス細胞になってしまうのです。細菌感染症では、細菌自体が取り除かれれば治りますが、ウイルス感染症では、治るということは、ウイルス細胞がなくなるということで、それは、ももとは自分のからだの細胞だったものが消滅する、ということの意味します。

粘膜や皮膚や肝臓のような再生能力に長けた組織では、ウイルス感染症になって、免疫によってウイルス細胞がやられても刻々と正常な細胞が再生してきて組織は修復されますから、のどや皮膚に穴が開いたり、肝臓の機能がなくなってしまうことはなかなか起こりません。これに対して、肺にウイルスが感染してしまうと、その時点で感染した細胞は肺の働きがあまりできなくなりますから呼吸困難になります。さらに、肺はほぼ再生しませんから、治る際には感染した部分の肺がごっそり消失することを意味します。つまり、ウイルス感染の範囲が広いと、肺は空洞になってしまって、二酸化炭素を吐き出し、酸素を取り入れるという肺の働きがなくなってしまうことを意味します。

これは恐ろしいことです。ウイルス性肺炎は、起こってしまったら元通りに治ると言うことはなく、感染した部分の肺がなくなってしまうのです。

乳幼児はそもそも肺が小さいです。高齢者では加齢によって肺機能は低下しています。喫煙者では、肺の機能はタバコの煙によって低下することがわかっていて、タバコを吸うと息切れしやすい人は、より肺機能が低下しやすい遺伝的なものがあるようです。肺機能低下には喫煙量も関係し、副流煙でも大きな影響が出る人もいます。

若者は肺の機能が充実していますから、少々ウイルスにやられてもまだ残りの肺機能で生きていけるかもしれません。しかし、肺機能が低下した高齢者や喫煙者がウイルス性肺炎にかかると、生死にかかわる状況になってまいります。

加齢や喫煙で悪くなった肺機能を若返らせる方法は現時点では発見されていませんが、今以上に悪くならないようにする方法はあります。禁煙です。

インフルエンザでは乳幼児も死亡しますが、新型コロナウイルス感染症では乳幼児の感染は報告されておらず、重症例は男性の方が女性よりずっと多いようですので、大気汚染や喫煙が関係しているものと推測されます。

そういうことで、風邪をひいて医療機関を受診すると、これを機会に禁煙しましょうよ、と勧められてみたりするわけ

ですが、これは意外と的を射た助言なんです。ビタミンCを余分に摂ればいいんでしょ? などと、あまり軽々しく考えていると後悔します。タバコでやられた肺は元には戻りません。

新型コロナウイルスでは、重症化する人は少なく、多くは感染しても必ずしも症状が出るわけでもなく、症状が出て咳が長く続くものの自然に治るようです。ただ、いったん治っても再感染か再燃して重症化したり、治った後もウイルスが便に排出され続けたりすることが報告されています。まだどのような経過を取るウイルスなのかよく分かっていませんが、免疫力が弱まらないようにしておきたいものです。体温が上がるようなこと、つまり、汗ばむような運動や入浴は日常的にやっておきたいものです。

マスクは飛沫感染には有効と考えられていますが、口や鼻の前のあたりは、ゴミやホコリや病原体が吸い寄せられてくっついている、と思って扱わないと、かえって濃いところを触ってしまうことになります。

感染症予防には手洗いは基本中のキホンです。うがいには、病原体がのどについた直後であれば洗い落とせる可能性があります。のどや口の中に長時間留まっているものではないので、効果は限定的です。むしろ、のどに病原体がくっつかないように、ずっと何かをのんでいた方が洗い流せて良いのかもしれない。インフルエンザやコロナウイルスは胃酸で死滅します。

インフルエンザウイルスやコロナウイルスのようにウイルス粒子がエンベロープと呼ばれる膜(がわたん)に包まれているものはアルコールで不活化されます。なお、アルコール消毒は、アルコールが揮発するときに効くとされており、表面を拭くと消毒されますが、飲んでも消毒効果はありません。

さて、風邪症状が出てしまったらどうしましょう。風邪薬をのみますか?

ウイルス感染症である風邪を治す薬はない、と専門家は言いますが、そのわりには風邪薬が多数市販されています。専門家は、ウイルスをやっつける薬はない、と言っているのに対して、市販の風邪薬は、風邪の諸症状である、のどの痛み、発熱、鼻水、咳、痰などを和らげる薬の配合です。のどの痛みの緩和と熱に対して、消炎解熱鎮痛剤が入っているのですが、感染時に発熱するのは、からだがつくなってあまり動きたくなくなるのと同時に免疫が活発になり、からだの治療専念モードに入っているようなものです。39℃を越える発熱は脳に有害とされていますが、38℃台の熱は虫に噛まれたところが赤く腫れ上がって熱を持っているのと同じこと、免疫細胞ががんばっている温度です。熱を下けた方が早く治るということはありません。免疫がウイルスに打ち勝つことができれば自然に熱は下がっていきますが、なかなか下がらない場合は病原体が体内で増殖し続けている可能性があり、危険な徴候です。37.5℃以上の熱が4日以上(高齢者や合併症がある場合は2日以上)続いたら久留米市新型コロナウイルス相談センター、電話0942-30-9335(夜間・休日は0942-30-9000)に電話をかけて指示をもらってください。